

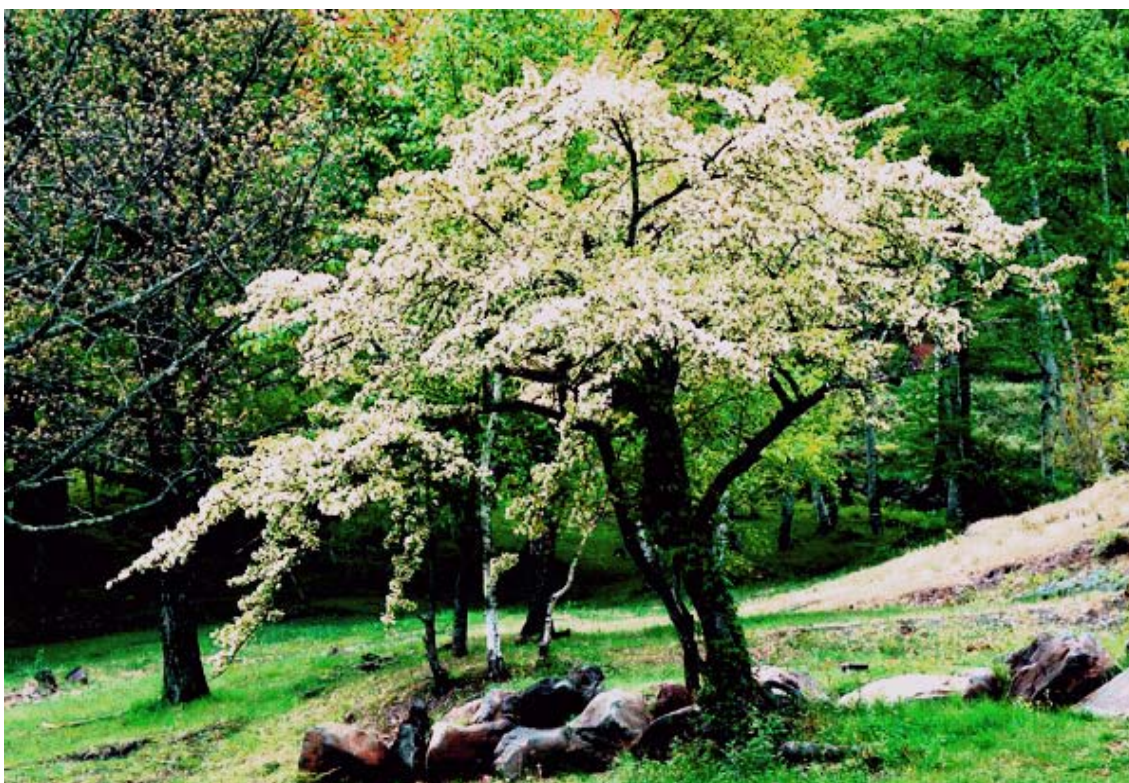
## 10) ズミ／コリンゴ／コナシ＝栲／棠梨／小林檜

ズミはバラ科の落葉高木で陽当りを好み、北海道から九州にいたる日本各地の少し湿り気が多い山地に生える。枝は大きく横に張り、高さは10mに達する。柄がある葉は、主に卵形または長楕円形で、しばしば3~5裂する。このため「ミツバカイドウ」などという別称がある。枝にはトゲがあり初夏、枝先に数個の長い柄のある花径3~4cmの白い花を散形状につける。蕾のうちは淡紅色を帯びヒメリンゴによく似ている。果実は直径が10mm前後の小球形で、赤または黄色に熟して、甘酸っぱい。和名の由来は「染み」の転訛したもので、かつては樹皮から黄色の染料をとる一方、明礬を加えて黄色の絵の具を作る材料にもされていた。別称としてはコリンゴ、ヒメカイドウ、コナシなどがある。上高地にある小梨平という地名は本種が多く自生することに由来するものである。学名は『*Malus sieboldii*』で、属名はギリシャ名のリンゴ「malon」に由来し、種小辞はシーボルトのという意味である。果実が黄色に熟するものは特に「キミズミ」ともいわれている。中国での呼称は「棠梨」で、棠はヤマナシまたはコリンゴを意味し、この文字を含むバラ科の植物は『海棠』を初めとして、ニワザクラを意味する『棠棣』（ドウテイ）『沙棠』（サトウ）など、中国には数多い。またイギリスでの呼称は「koringo crab apple」で、crabは一般的には蟹のことであるが、野生リンゴの意味がある。ズミは盆栽として植えられる一方、かつてはリンゴの台木として広く用いられていたが、最近では分類的にズミよりも林檎に近いマルバカイドウを多く用いている。また前述のごとく以前は黄色の染料をとる有用植物でもあった。

ズミは桜やリンゴなど他のバラ科の美しい花にうずもれてしまい、ズミという名称を知る人も最近では少なく、ともすると存在感の乏しい木になりがちである。しかもヤマザクラなどと同じ頃に咲くために、間違えて認識されるケースも少なくない。しかし春、野山を歩いていると、よくこの花に出会うので、ハイカーには忘れることのできない花でもある。また秋の果実も真っ赤に熟して美しく、口に含むと、甘味の中に酸味がいっぱい広がって、ひととき疲れを癒してくれる。ズミは日本中何処にでも古木があって、それぞれ旅の思い出になっている木でもある。軽井沢では地元の人にはコリンゴと呼んでいる。しかし筆者にとって忘れられないのは、八ヶ岳北山麓にある佐久穂町八千穂高原の町営キャンプ場のズミである。5月の連休を過ぎる頃、満開の花が美しい。付近は白樺の林が延々と続き、その中には静かな湖沼が横たわり、同じ頃ミツバツツジの花がいっせいに開花して湖面に映える。信州の数ある高原の中でも最も美しい場所の一つであろう。オートキャンプ場が隣接され、付近には白樺が50万本自生し、夏休みともなると家族連れでにぎわう。ズミは街路や公園、庭などにも植えられるが、果実酒として愛飲する人も多い。材は緻密で堅く櫛、家具や細工物、器具材などに利用されている。



ズミの花、4月頃リンゴに似た花を咲かせる。美しい花を咲かせるものの、幹は痛みやすく、空洞になることが多い。時々この空洞に小鳥が巣を作る(群馬県神津牧場)。



満開のズミの木。周辺には白樺林やキャンプ場が広がる(長野県佐久穂町)。

[目次に戻る](#)